

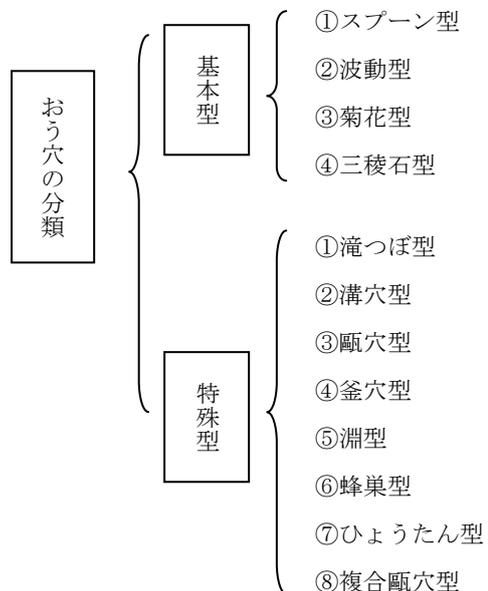
鳥取市指定文化財調書（案）

1 種別及び名称	天然記念物 赤波川おう穴群
2 員数	1
3 所在の場所	<p>鳥取市用瀬町赤波地内赤波川河床で、次のAの地点からDの地点までを結んだ線により囲まれた区域における部分</p> <p>Aの地点 北緯 35 度 19 分 519 秒 東経 134 度 13 分 743 秒</p> <p>Bの地点 北緯 35 度 19 分 515 秒 東経 134 度 13 分 768 秒</p> <p>Cの地点 北緯 35 度 19 分 036 秒 東経 134 度 13 分 696 秒</p> <p>Dの地点 北緯 35 度 19 分 029 秒 東経 134 度 13 分 686 秒</p>
4 所有者・管理者の氏名 (名称) 及び住所	<p>土地所有者 国土交通省中国地方整備局鳥取河川国道事務所</p> <p>河川管理者 鳥取県東部総合事務所</p>
5 現状	<p>赤波川は智頭町市の瀬字吹谷口に源を発し、用瀬町鷹狩字馬橋で千代川に注ぐ流長 15.3km の小河川である。この流域には中生代末期(約 8,000 万年前)に形成された花崗岩が広く分布しているが、特に洗足山(736.3m)東麓では、この花崗岩が赤波川により深く侵食されて、美しい溪谷が形成されている。この付近の河床露岩には花崗岩特有の節理が発達し、この節理を主要因として、激しく流下する水流の働きでおう穴をはじめ、赤波川特有の河床地形が形成されている。おう穴の見られる箇所は、赤波川中流域の大村発電所取水口から下流に 1.2km の区域で、大小のおう穴をはじめ、滝、ラピエ状の侵食地形 注1)等が発達している。この溪谷を特徴づけるおう穴は多様で、滝つぼ型、溝穴型、甌穴(かめあな)型、淵型 注2)などが見られる。これらのおう穴は現河床面に見られるも</p>

	<p>のや現河床より 2～3m 高い岩棚に見られるものなどがあり、形成過程の複雑さを伺わせている。</p> <p>「大正以前の事はよくわからないが、大きなおう穴の形は昭和のはじめ頃から変わっていき、当時より河川を流れる水量が減った」という地元の話が有るように、水中にあるおう穴以外は砂礫に埋まって活動を停止しているものもみられる。いずれにせよ、赤波川渓谷は多種多様なおう穴群、巨大転石によりせき止められてできた淵や滝、速い流れにより形成されたラピエ状地形等の特有な河床地形等が見られ、特有な渓谷となっているとともに、白い花崗岩が周囲の緑に映えて人々の心を和ませてくれる美しい渓谷となっている。</p>
6 所見（指定理由）	<p>おう穴は、河床の岩盤にある節理や節理と節理の交点などが流水による侵食により拡大し、さらに、そこに入り込んだ砂礫の研磨作用を受けて形成される丸みを帯びた窪みである。</p> <p>鳥取県内には三朝町の小鹿渓谷、日南町の石霞溪、智頭町の三滝渓谷、湯梨浜町(旧泊村)の甲亀山北岸等に見られるが、赤波川おう穴群は、種類の多様さ、分布域の広さ、河床地形の特異さに特徴があり、県内のおう穴群に見られない貴重なおう穴群である。赤波川おう穴群の分布域が上域、中域、下域に区分でき、それぞれの分布域に特徴のあるおう穴が見られる。また、河床が花崗岩に発達する節理に影響されて階段状になっていて、大きな淵の最下流部は滝になっていたり、流路が複数に分かれて V 字状の溝流路となって流れくんだり、いわゆるラピエ状河床地形ができています。このような河床上に形成されている微地形は赤波川の変遷を考える上で極めて貴重なもので、地質学的にも価値の高いものである。</p>
7 参考資料等	<p>用瀬町赤波川おう穴群調査報告書 (1994 用瀬町教育委員会発行)</p>
8 その他参考資料	<p>赤波川おう穴群指定範囲図 鳥取市用瀬町赤波川おう穴群の文化財指定について（経過及び現況）</p>
9 調査者	<p>星見清晴</p>
10 調査日	<p>平成 23 年 12 月 7 日</p>

注 1) ラピエ状地形・・・水の流れにより岩石に複数の小さな溝状の地形が形成された時、  
小溝間に鋭い稜として残された突出部をいう。

注 2) 伊藤隆吉氏 (1979 日本のポットホール) のおう穴分類



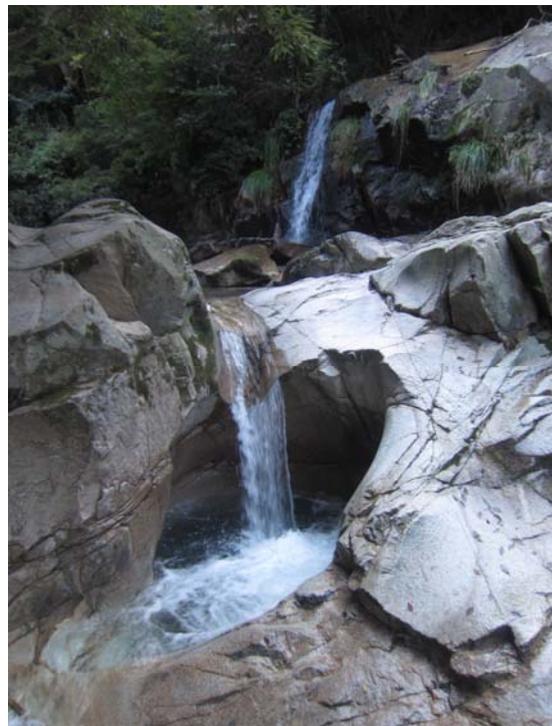
赤波川おう穴群写真



階段状河床



ラピエ状の河岸地形



滝つぼ型おう穴



鬼の井戸場



複合型おう穴